

リ、桑椹熟スル時ノミ早朝ニ來ル、柴鶴トハ異ニシテ、大サ伯勞ノ如シ、全身黄色、眼ハ紅色ヲ帶ビ、目ノ通り頸ヲメグリテ黒シ、風切黒ク、ホロハ微黒雜ハル、尾ハ本末黄色ニシテ中ハ黑色ナリ、尾尖ニ小紅アリ、甚鮮ナリ、喙尖リテ紅色、脚掌灰色、立春ノ後鳴ク、柴鶴ノ聲ヨリ大ナリ、ウグヒスハ一名春鳥萬葉集トハメドリ古歌ハナミドリニホヒドリ三月スコドリ上共同春鳥子和名ハルノトリ源氏物語漢名柴鶴清俗

〔飼鳥必用〕中黃鳥。

此鳥さへ宜敷皆少し薄赤總羽黄色にして、大羽の中に黒み有り、頭ノ目尻より黒みあり、頭にはち卷きたるごとくに見へ、足少し赤く、鳥の程ひよどりより少し大形にて、間々日本へ見へる、先年薩州山川湊の邊に大松江とまり居て、松虫を取喰しを見たる也、何れも九州江渡る鳥なり、能ク心掛ケベシ、

鶯飼養法

〔閑田耕筆三〕鶯なども聲の引色、三光の囀などいひて、親鳥を撰み、つけ子とてかれがこゑを學ばしむとか、これも舊としの内に、聲まどろなるより、やうく日影のどかに成行につけて、うちとくる音をおのれもうれしげに枝うつりして遊ぶさまは、籠の内にさびしげなるにはいづれ、さるをこれは野鳥といやし、み飼鳥の音あしくなるとて、竹棹なども追やらふ人もありとなん、畢竟世の風に乘ると、價の貴きにまどふならしやは、あるは耳目の翫びにはあらで、利を求るがために、他の好みを射るも多しとか、士農工商各其業あるがうへに、かうやうの小徑によりて、利を謀るは論ずるに足らねども、また大息せらる、

〔嬉遊笑覽十二〕嘉多言に、鶯の子を巢よりおろして、よき鳴の籠にならべて飼そだて侍れば、程なく其聲を囀るといへり、其聲に三光を鳴をよしとすといへり、正章獨吟、鶯も三皇の御代をはつ音かな、貞徳が判の長歌、月日ほしと、となふる鳥の、三くわうを、おもひもかけぬ、もろこしの、むか